

ひたちなか 埋文だより

63



博物館実習とキャリア探検ラリー ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの夏の恒例事業は、学芸員資格を取得するための博物館実習です。2025 年度は、考古学専攻の 2 人の大学生が参加しました。また、今年の夏休み期間中は、博物館実習に加えて、市内の小中学生を対象とした「キャリア探検ラリー」という職場体験事業も加わりました。今年はこの 2 つの事業をあえて同時期にしてみました。博物館実習生には前日学んだセンター内のバックヤードツアーの解説をお願いし、キャリア探検ラリーの受講生はその説明を熱心に聞いていました。博物館実習生の説明を聞いてみると、職員とは違った視点で解説していて、職員も勉強になる事業だと思います。(2025.8.20)

CONTENTS	調査報告 十五郎穴横穴群出土ガラス小玉の分析 (鎌田 涼)		
	「私的茨城考古学外史ー遺跡・人 出会いと別れー」 第 12 回 発掘三昧への道 県内編 7 (瓦吹 堅)		
	馬渡埴輪製作遺跡発掘 60 周年		
	横穴墓を歩く③ 熊野堂横穴墓群 (鴫崎 哲也)		
	ワンケース・ミュージアム 63 住居跡に残された灯明具	遺跡めぐり 大悲山石仏を訪ねて	
	ワンケース・ミュージアム 64 十五郎穴出土の玉類	のぞき見、展示室⑩ ガラス小玉	
歴史の小窓③ 形見？ 鎮具？	埋文センターの日々 2025 前期		ほか



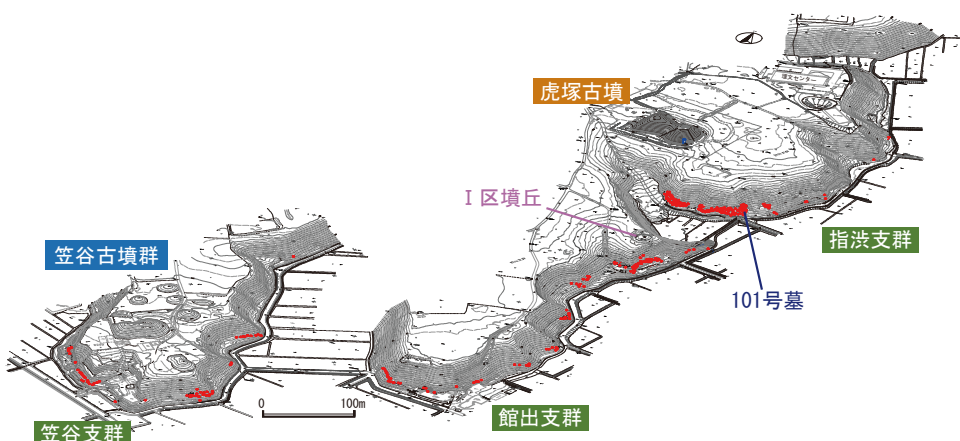
第101号墓の玉類出土状況写真（十五郎穴横穴群第1次調査）

十五郎穴横穴群出土 ガラス小玉の分析

鎌田 涼

十五郎穴横穴群館出支群で出土した蔵手刀や金銅製飾り金具付きの刀子などの遺物が2024年12月26日に県指定文化財となりました。同遺跡ではその他にも多数の貴重な遺物が確認されており、その中にガラス小玉があります。そのガラス小玉について蛍光X線分析した結果が筑波大学で刊行されている『先史学・考古学研究』で報告されました。

今回はその報告の概要について紹介します。



第1図 十五郎穴横穴群全景（赤が横穴墓の位置）



第2図 十五郎穴横穴群 指洪支群VI区



第3図 101号墓出土ガラス小玉

はじめに

十五郎穴横穴群は、那珂川支流の中丸川と本郷川に沿った大きく三つの突出する凝灰岩台地の崖面に位置する横穴墓群である。横穴墓の推定数は五〇〇基以上と東日本最大の規模を誇

り、三つの谷によって「指洪支群」「館出支群」「笠谷支群」に分かれている。館出支群のI区三二号墓では直刀、I区三五号墓では蔵手刀、刀子、鉄鏃などが出土しており、正倉院宝物との関連性が指摘されていることで注目されている。一方、館出支群の隣、指洪支群のVI区第一〇一号墓（以下、「一〇一号墓」）からは青色のガラス小玉が約一五〇点出土している。これまでガラス小玉は分析が難しく調査されていなかったが、この度これらの出土資料を網羅的に分析する機会を得たことから、ここでは十五郎穴横穴群出土ガラス小玉の調査結果の報告を行う。

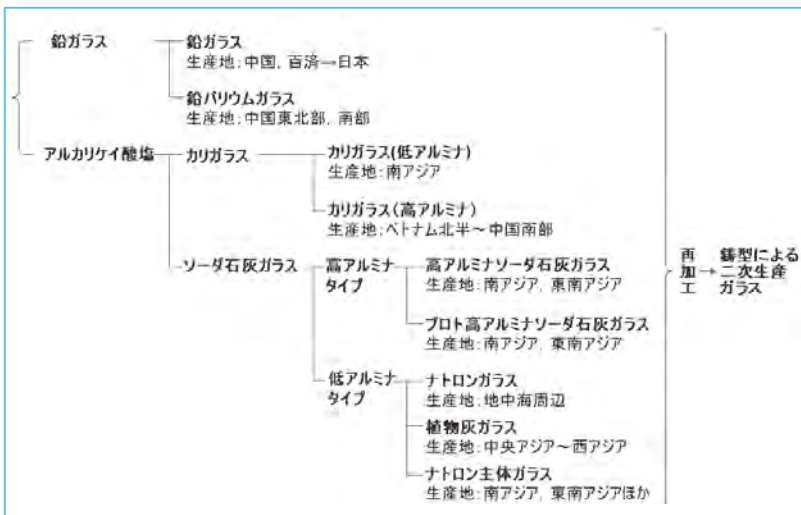
ガラス小玉研究の概要

分析の詳細に入る前に、ガラス小玉研究の概要について紹介する。

ガラス小玉を用いた首玉、手玉などの装飾品は弥生時代から副葬品として数多く出土しており、その分布範囲は北海道から沖縄まで広範囲である。しかし、古墳の副葬品の中で、ガラス小玉は非常に小さいことから型式的な研究を行うことが難しく、あまり注目を受

けることがなかった。ところが近年、文化財を対象とした科学分析の研究が急速に進み、ガラス小玉が内包する情報を得られるようになったことから、ガラス小玉は当時の流通を解明する手がかりに適切な資料であるとして近年盛んに研究が行われている。

ガラス小玉を含む玉類を対象とした先行研究において、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての西日本を対象に、出土状況などから玉類の流通について検討されている。それによる



第4図 蛍光X線分析によるガラスタイプ分類

と、遠隔地から玉類を入手するという行為自体が、地域社会の上位層においてより優位な立場を獲得していたという見解が示されている(谷澤二〇二〇)。したがって各遺跡で出土した玉類が外部からどのように入手されたかについて解明することは、玉類が当時どのように扱われていたかということ明らかにするうえで重要な課題であるといえる。

日本列島では七世紀後半に奈良県飛鳥池遺跡(あすかいけ)において原材料からガラスの製造が開始された事例がみつかったているが(大賀二〇一〇)、それ以前は列島内でガラスの一次生産がおこなわれた事例は確認されておらず、ユーラシア大陸の各地で製作されたガラス小玉が流入して利用されていたと考えられている。

ガラス小玉がどのように入手されたのかを明らかにするためには、その入手経路を想定することが重要である。近年は、陸を介した流通だけでなく、「海浜型前方後円墳」の存在などから海を介した流通について言及されることも多い(広瀬二〇一五)。常陸も例外ではなく、前期古墳の墓制のありかたから海を介した流通経路の存在が指摘されており(日高二〇一五、蓼沼二〇一五)、また磯崎東古墳群をはじめとした沿岸部の後・終末期古墳においても、海との深い関連性が指摘されおり(稲田二〇一九)、常陸と西日本との関わりにおいても太平洋を介した海路の存在が浮かび上がっている。

ガラス小玉に関する先行研究より、ガラス小玉は列島外から搬入され各地で副葬されるに至ったことが想定されているが、各々の入手形態は多様かつ煩雑で捉えることが難しい。したがって本研究では、ガラス小玉の観察、蛍光X線分析によるガラス素材のタイプ分類を網羅的に行ったうえで、ガラス小玉の入手形態の解明を目指した(第4図)。

ガラス小玉の製作技法

ガラス小玉の製作は大きく分けて3つの工程、①シリカの溶融、②着色、③成形から成る。ここで重要となるのは流通がどの段階で行われるかという点である。成形後のガラス小玉の流通だけでなく、シリカの溶融を行ったあとの未着色のガラスカレットやガラスインゴットとして流通していた可能性も考えられる。すなわち、ガラスの生産地と玉の製作地(成形を行う場所)が一致するとは限らない。また二次生産の可能性も考慮する必要がある。二次生産とは、ガラス小玉が割れたもの、もしくは意図的に粉砕したカレット状のものを素材として鋳型にはめ込んでから再度溶融し、玉類の形状に再成形する工程を指す。列島内におけるガラス小玉の生産遺跡は七世紀後半の飛鳥池遺跡であると述べたが、それよりも前から列島内においてガラス小玉の製作に関する遺物は出土している。いわゆる「たこ焼き型鋳型」と呼ばれる鋳型である(第

5図)。鑄型にカラット状のガラスが付着しているものなどが出土していることから、二次生産は列島内において一次生産が開始するよりもかなり前から行われていたことがわかる。また、ガラス小玉の一次生産品と二次生産品の見極めは、現在顕微鏡観察によって行われている。

十五郎穴とガラス小玉

本題の十五郎穴横穴群の出土ガラス小玉について述べる。

ガラス小玉が出土した一〇一号墓のある指浜支群の台地上には虎塚古墳が立地している。この立地から虎塚古墳と十五郎穴横穴群の関連性は高いと考えられており、虎塚古墳の築造年代は7世紀前半代、追葬は最新で7世紀中頃とされていることから、十五郎穴横穴群の大半が形成された時期は7世紀前半から8世紀代に形成されたと推定されている。指浜支群では虎塚四号墳（方墳）よりも古い須恵器が出土したことから、虎塚古



第5図 埼玉県薬師堂遺跡出土のガラス小玉鑄型（大賀 2020）

墳の築造とほぼ同時期に横穴墓の造営がはじまっていたと予想される。

一〇一号墓は追葬の可能性が高いことからガラス小玉の原位置は不明であるが、ガラス小玉と共に水晶製切子玉、メノウ製勾玉が出土している。ガラス小玉は、大きく紺色のものと淡青色のもの二種類に分かれる。また、白色化したものや破碎されたものも含まれているが、概ねガラスの質が非常にいい。大きさは直径八ミリメートル程度のものが大半を占めるが、一部直径四ミリメートル程度の小玉や、一五ミリメートル程度の大きな玉も含む。

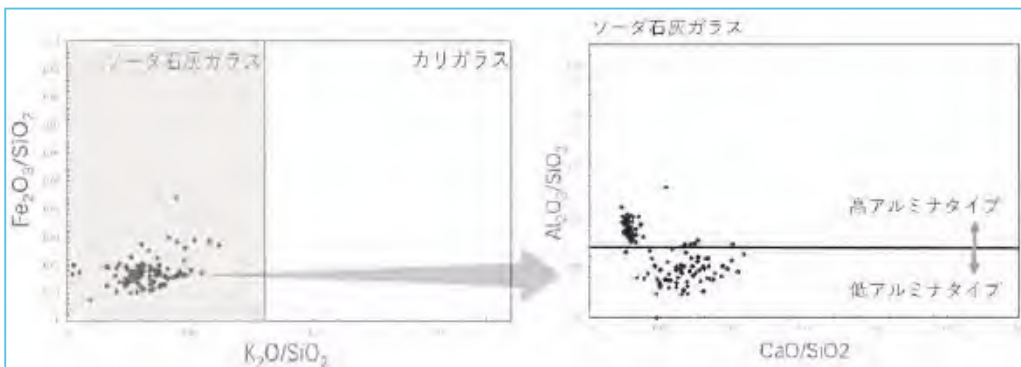
出土した玉類の概要

出土した玉類の概要

ガラス小玉に対して蛍光X線分析をおこなった。ガラスタイプの分類をおこなった。散布図（第6図）より、高アルミナソーダ石灰ガラスが七六点、低アルミナソーダ石灰ガラスが八〇点であることがわかった。ただし、第6図において境界線付近に位置する資料が複数点存在する。この資料については明確な判断が難しいが、分布傾向からここではカルシウム含有量の低い資料は高アルミナソーダ石灰ガラス、高い資料は低アルミナソーダ石灰ガラスとして判断した。低アルミナソーダ石灰ガラスについてカリウム含有量から植物灰ガラスが七五点、ナトロン主体ガラスが五点であると判断した。

観察の結果と分析結果を照合させた結果、直

径三〜四ミリメートルの紺色透明の資料二一点はコバルト着色の植物灰ガラス、直径六〜七ミリメートルの濃青色透明の資料七六点は銅着色の高アルミナソーダ石灰ガラス（第7・8図）、直径七ミリメートルの紺色不透明の資料二六点はコバルト着色の植物灰ガラス（第9図）、直径七一〜九ミリメートルの紺色不透明の資料二〇点はコバルト着色の植物灰ガラス、直径一三〜一五ミリメートルの紺色不透明の資料八点はコバルト着色の植物灰ガラス（第10図）、破損した資料（第11図）五点はコバルト着色のナトロン主体ガラスである



第6図 101号墓出土ガラス小玉の蛍光X線分析

ことがわかった。これらのガラスタイプ、着色剤およびサイズの組み合わせは先行研究である田村（二〇一三）の傾向と一致していたことから、妥当な結果と判断できる。

ガラス小玉の編成と入手形態

ここで、ガラス小玉の色調・サイズ・製作技法の状態の組み合わせから想定される入手形態を四つに区分したものを表1に提示する。ここでいう「再編成」とは、各地で製品化されたガ



第7図 直径6-7mmの濃青色透明銅着色の高アルミナソーダ石灰ガラス



第8図 101号墓出土 高アルミナソーダ石灰ガラスの顕微鏡写真

（気泡が孔に沿って並んでいる様子から、引き伸ばして製作されたことがわかる）



第9図 直径7mmの紺色不透明コバルト着色の植物灰ガラス



第10図 直径13-15mmの紺色不透明コバルト着色の植物灰ガラス



第11図 破損資料 コバルト着色のナトロン主体ガラス

形された一連の状態が副葬されるまで保持されていた可能性が高く、入手形態としては「製作地から再編成されることなく消費地まで移動」した資料に分類することが可能であると考えられる。すなわち、製作地から副葬されるまでに再編成が行われなかった可能性が低い。このことは、このガラス小玉が首飾りないし腕輪の状態を崩すことなく、大切に保持される存

ラス小玉を一か所に集め、元の組み合わせをばらしたうえで改めて一連に編成し直す行為を指す。したがって列島内で再編成した場合は、在地の玉類（石製の勾玉や管玉、切子玉など）も一緒に編成する可能性も含む。また、最終的にガラス小玉に成形した場所や再編成が行われた地域については現時点では限定しない。この区分を基に一〇一号墓で出土したガラス小玉の入手形態を考察する。

一〇一号墓で出土したガラス小玉はガラス

の素材において大きく二つのガラスタイプがみられるが、出土遺跡が横穴墓であることから複数回にわたる追葬の可能性が高く、再編成の有無における判断が難しい。しかし、資料はすべて一次生産品と考えられ、同じガラスタイプ（生産地が同一）のものは製作技法も一致している。加えて、それぞれ出土数が七〇点前後であり一連の首輪などを形成するのに十分な数である。一方で勾玉や切子玉など他の玉類も出土しているが、どちらも一〇点近く出土しており、ガラス小玉とは別の一連として玉類の種類ごとに消費地に流入したことが想定される。したがって、同じガラスタイプの資料については生産地で成

在であったことを示唆する。また、七〇八世紀における列島内のガラス小玉の流通は下火であり、状態のいい一次生産品のガラス小玉が流通しづらい時期であることから、この時期にあたる一〇一号墳の事例は古墳時代後・終末期のガラス小玉の流通を理解するうえで貴重な資料である。

結語

一〇一号墓から出土したガラス小玉について、これまでに得られた結果と考察を紹介した。今後は、列島内外において同時期に出土したガラス小玉と比較から、入手にいたった経路についても検討されることを願う。

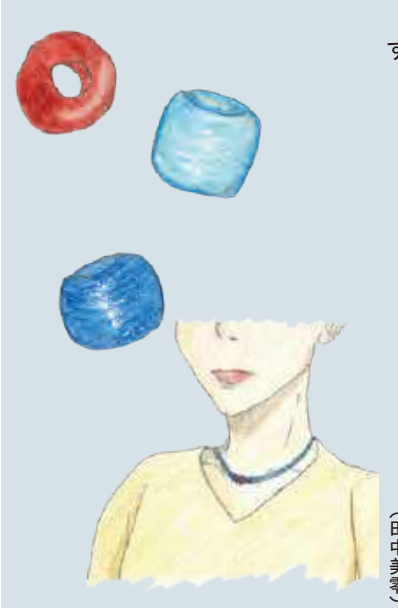
参考文献

- 稲田健一 二〇一九「装飾古墳と海の交流 虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群」新泉社 p. 四二一九
- 大賀克彦 二〇一〇「弥生時代におけるガラス製管玉の分類的検討」古川登編『小羽山墳墓群の研究』研究編 福井市郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会 p. 一一三―一二三
- 大賀克彦 二〇二〇「磯崎東古墳群出土の玉類」『埋文だより 五二号』 p. 一四―一八
- 蓼沼香未由 二〇一五「長柄桜山古墳群と外洋世界の海浜型前方後円墳 ②磯浜古墳群（目下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳）」『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団 同成社 p. 六二―七五
- 谷澤亜里 二〇二〇『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』

表 1 ガラス小玉の状態の組み合わせと入手形態の関係性

状態の組み合わせ	想定される入手形態
色調・サイズ・製作技法が均一	製作地から再編成されることなく消費地まで移動
色調・サイズが均一、製作技法は多様	列島内に流入後の再編成の回数が比較的少ない
色調・サイズ・製作技法が不均一	製作地から消費地に至るまでに複数の再編成
激しく風化	消費地に近い玉作り通跡で二次生産・再編成された可能性

- 同成社 p. 一一―一三、七〇―七九、一三三―一六五
- 田村朋美 二〇一三『日本出土アルカリ珪酸塩ガラスの考古科学的研究―弥生・古墳時代に流通したガラス小玉の再分類―』京都大学 p. 七―一七三、七八―九二
- 日高 慎 二〇一五「内海世界の海浜型前方後円墳」『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団 同成社 p. 七六―八九
- 広瀬和雄 二〇一五「海浜型前方後円墳を考える」『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団 同成社 p. 一―三八



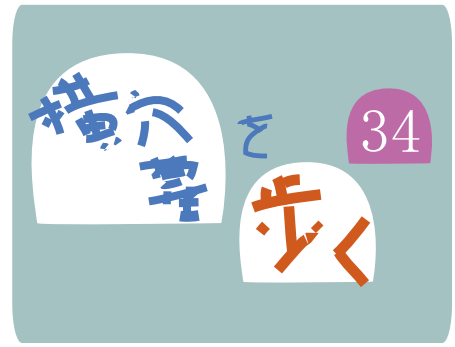
のぞき見
展示室
その10

第一〇回で紹介するのは、^{たかのす}鷹ノ巣遺跡から出土した「ガラス小玉」です。

鷹ノ巣遺跡は、ひたなかICから南東の台地上に広がり、弥生時代後期～平安時代にかけての生活の痕跡が確認されている遺跡です。これまでに四回の調査が実施されています。第二次調査では弥生時代後期中葉と考えられる第47号住居跡からガラス小玉57点が出土しました。市内で現在までに確認されているガラス小玉で最も古いものです。ガラス小玉は、赤色1点、紺色6点、青色50点の三色が確認されています。このガラス小玉で首飾りを想定すると、中心に赤、その左右に紺色3点ずつ、そして青色と並べることができそうです。当時、本当にこの並びで使用されていたなら、とてもおしゃれなアクセサリーだと思えます。

ガラス小玉は青色のものが多くですが、市内では他に磯崎東古墳群で黄緑色のガラス小玉も確認されています。

（田中美雪）



宮城県名取市
くまのどう
熊野堂横穴墓群

鴫崎 哲也

(名取市歴史民俗資料館)

熊野堂横穴墓群は、七世紀から八世紀に営まれた県内有数の横穴墓群で、一〇〇基以上あると推測されています。古くから「エゾ穴」とも呼ばれ、蝦夷が住んでいたと考えられていました。太平洋戦争中には防空壕に利用され、後に大規模に盗掘された経緯なども踏まえ、昭和四十一年に名取市の指定史跡となりました。

北西部の高館熊野堂岩口上・大門山・五反田・十二神に所在し、名取川が標高約二〇〇メートルの高館丘陵から平野に差しかかる右岸の丘陵部、約八〇〇メートルの範囲に分布が認められます。四つの支群で構成され、細かい礫岩や石灰質砂岩から成る茂庭層を掘って造られています。

平成元年度と六年度に団地造成に伴う発掘調査が行われ、A～Cの三地区に大別されています。

下部のA地区は、標高五十～六十メートルの南東から南向きの斜面で、五十四基確認しました。

多くは崩落などで前庭部や羨道部の一部が失われ、羨道部から玄門・玄室を確認しています。玄室は隅丸方形や長方形の両袖型で、室内には棺座などもなく、天井はドーム形、玄門の閉塞は川原石積みで、羨道部が短いものが主体です。副葬品は少なく、土師器(坏・碗)、須恵器(坏・蓋・壺・ハソウ)、装身具では鈴釧、貝輪、玉類(勾玉・切子玉)、鉄製品では直刀(圭頭大刀を含む)、矛、鉄鏃が出土しています。

中段のB地区は、A地区の斜面上方、標高六十～七十メートルの東から南東向きの斜面で、二十基確認しました。上段

のC地区は、標高七十～八十メートルの南東から東向きの斜面で、十基確認しています。どちらも当初の形を残すものは少なく、羨道部や玄室を確認できたものが大半です。玄室の平面形は方形・長方形・隅丸方形の両袖型などで、室内に棺座などがなく、天井はドーム形やアーチ形のもものが基調です。出土状況に偏りがありますが、副葬品は、土師器(坏・



写真1 熊野堂横穴墓群A区



写真2 熊野堂横穴墓群B・C区

碗・蓋)、須恵器(坏・蓋・壺・ハソウ・長頸瓶・フラスコ形長頸瓶・平瓶)、鉄製品(直刀、刀子、鉄鏃)のほか、鹿角製刀装具や金銅製の耳環などが出土しています。

熊野堂横穴墓群は、規模や副葬品などから、高館熊野堂周辺を拠点とした有力氏族の集団墓と推定されています。県内の横穴墓は、河川沿いや官衙関連遺跡の近くに築かれる傾向もあり、本横穴墓群の被葬者の中にも、初期の陸奥国府とされる郡山官衙遺跡や公的性格を有する集落などと、何らかの関わりを持つ人がいたのかもしれない。

A 地区の台地平坦部では、工房跡や粘土採掘坑、住居跡が確認されています。現在は遺構の形にツゲの木が植えられており、遺構の場所が分かるようになっています。

発掘調査時(1966 年第 3 次調査)



現在



馬渡埴輪製作遺跡の全体図



発掘調査時(1965 年第 1 次調査)



現在



最初に調査された A 地区の斜面部で、窯跡が 9 基確認されています。きっかけとなった馬形埴輪もここで見つかりました。現在は窯跡の形が分かるように整備されています。



馬渡埴輪製作遺跡 発掘 60周年



まわたりはにわせいさくいせき
馬渡埴輪製作遺跡は、古墳の周りに並べて使用された「埴輪」を製作していた遺跡です。勝田第三中学区である馬渡^{むかいの}字向野に所在し、小さな谷津の台地上と斜面部に広がっています。現在は馬渡はにわ公園・花しょうぶ園として親しまれています。

遺跡は埴輪が確認された順に A～C 地区に分けられ、1965 年（昭和 40）の 8 月に明治大学考古学研究室と勝田市（現ひたちなか市）教育委員会の共同で発掘調査が始まり、1969 年（昭和 43）までの 4 年間にわたり 7



A 地区窯跡の発掘調査のようす

次の調査が実施されました。調査では、埴輪を焼いていた窯跡や埴輪を成形していた工房跡、材料である粘土を採っていた粘土採掘坑、^{かまあと}工人在住していたと思われる住居跡などが検出されています。日本ではじめて埴輪を製作する一連の遺構が確認され、1970 年（昭和 44）には国指定史跡に登録されました。2025 年は最初に発掘調査が実施されてから、60 周年を迎えます。

その後、1981 年（昭和 56）から 1988 年（昭和 63）に遺跡の範囲確認のため D～F 地区で追加の発掘調査が実施され、これまでに窯跡 19 基、工房跡 12 基、粘土採掘坑 26 基、住居跡 2 基、埴輪廃棄場 2 基が確認されています。

埴輪の製作遺跡なので完成品は古墳へ運ばれ、製作遺跡に残っているものは、いわゆる失敗作や割れてしまったものです。そのため形が良く残った埴輪は少ないですが、^{うまがた}馬形埴輪をはじめとする動物埴輪の一部、^{えんどう}円筒埴輪、^{いえがた}人物埴輪や家形埴輪の一部が確認されています。窯跡の操業は 5 世紀後半に C 地区で開始され、6 世紀には A・B・D 地区で埴輪を焼いていたと考えられており、出

ぼくは標本陳列室に
展示されているよ！



最初に発見された馬形埴輪

～遺跡発見の経緯～

当時の勝田第三中学校の生徒がユリの根を探していたところ、偶然に馬形埴輪を採集しました。古墳があるとは考えられない場所であり、知らせを聞いた明治大学の先生が現地を確認し、窯跡の可能性があると考え調査が実施されることになりました。

土した埴輪の特徴から生産された埴輪は市内の川子塚古墳^{かごづかこふん}や鉾の宮古墳群^{ほこのみやこふんぐん}などに運ばれて利用されたと推定されています。埴輪以外には、製作や生活の道具と考えられる土器^{てつぐわ}や鉄鍬、埴輪の装飾に使用された顔料と考えられる一握りのベンガラなどが検出されています。

昭和四十七年二月一九日、長野県のあさま山荘に極左の連合赤軍残党五人が人質をとって立て籠る事件が起き、テレビ中継された。これは共産主義化を目的とした過激なテロのひとつであり、まだ世の中には学生運動の残骸が漂っていた。

そんな中、昭和四十七年三月五日から三月二二日まで実施された水戸市台渡里廃寺跡の三次調査に参加した。二次調査の際(『埋文だより』61に掲載)、工房跡から出土した埴(は)土(つち)型(がた)は高井先生が勤務していた辰馬考古資料館に暫く保管されていたが、その後水戸市教育委員会に返還になった。高井先生は平成一三年まで辰馬考古資料館館長職を務められておられたが、平成一六年九月二八日鬼籍に入られた。

当時の台渡里廃寺跡は、南方地区・観音堂山地区・長者山地区の三地区を中心に、古代那賀郡の中枢部と考えられており、三次調査は観音堂山地区周辺で実施した。この地区は南と西側に段切され、区画溝などの施設の検出のため調査区を設定したが、明確な遺構は検出されなかった。当時観音堂山の東には茨城大学の実習地があり、その一部に囲いをして豚が放し飼いされていた。この地区からは文字瓦が多く発見されると伊東さんは話されており、「徳輪寺」「阿波郷」などの文字瓦が出土している。

茨城大学に考古学研究会が発足したのは昭和四十六年秋頃と記憶している。その発足メンバーは中村雅利・高村勇・鶴見貞雄・藤崎吉見・

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第12回 発掘三昧への道 県内編7

水戸市台渡里廃寺跡 (三・四次)・石岡市舟塚山古墳



台渡里廃寺跡第3次調査参加者



堅 吹瓦

貝塚由美子・斉藤礼子君達6名で、三次調査に発足メンバーのほか新人も参加し、当時渡里小学校に通っていた塚本師也君も学校から帰るとよく現場に顔を出した。私と数人の参加者は末広町の清水旅館が宿泊所となった。時折、伊東さんのお供で大工町を飲み歩いたが、現在営業を続けている店はほとんどない。大工町交差点近くにあったおでん屋「乃ぐち」はよく通った店で、イカ一皿でコップ酒四杯を飲むように教えられたが、飲みながらの考古学談議は懐かしい。時々、台渡里廃寺跡の調査に参加していた茨城大学生も同行し、カウンターはいっぱいになった。しかし令和二年三月、惜しまれながら店を閉じた。大工町を飲み歩いてきたこの頃、有線放送からはチューリップの「心の旅」や八代亜紀の「なみだ恋」がよく流れていた。

台渡里廃寺跡の四次調査は、昭和四十八年三月二四日から四月一日の期間、長者山地区に於て実施された。高井先生がかつて礎石建物跡を検出していた地区で、その建物跡の南側で二基の礎石建物跡を発見した。この時の調査参加者も茨城大学考古学研究会会員が中心だった。

毎年三月下旬になると、水戸東武館主催の少年剣道大会が水戸で開催され、その大会には少年剣士が全国から参加するため市内の宿泊施設は満杯になり、我々は清水旅館から追い出され、女将さんの娘さんの家に二泊したこともあった。

台渡里廃寺跡の三次調査の後、石岡市教育委員

会の小松先輩の要請で国指定舟塚山古墳の調査に参加した。この調査には、茨城大学生にも声をかけた。この舟塚山古墳の調査は、古墳の周溝の規模や周堤上に分布する円墳との関係などについての調査で、昭和四十七年三月二十八日から四月一日の期間実施された。調査の担当は、文化庁の推薦もあつて日本大学三島高校山内昭二先生で、そのほか同僚根本庸光先生や日大〇田沢田大太郎氏、また台渡里廃寺跡三次調査に参加していた茨大考古研の連中も移動し、新たに日大三島高校〇田も加わった。宿舎は石岡駅前の吉川旅館だったが、旅館の都合で一時舟塚山古墳近くの営農センターにも宿泊した。舟塚山古墳本体には、前方部と後円部、及び括れ部、前方部北部角部にトレンチを周堤部まで設定して調査し、さらに前方部の周堤部上の周囲が削平されている八号墳（現一七号墳）も調査した。括れ部の墳丘下段部からは土師器ハソウや円筒埴輪が出土。八号墳では割竹型木棺が検出され、木棺上には赤い漆塗革製盾が被せられた状態で出土。盾は皮に塗られた漆幕だけが残っていた状態だった。木棺内からは、鉄刀のほか短甲が出土し、東側の



舟塚山古墳群8号墳調査検討会

周溝からは五世紀代の壺が出土した。盾の発見は茨城県内初のこと、新聞社の取材もあったので大きく報道されるものと期待した。報道日に一面を飾ったのは奈良県高松塚古墳の壁画発見の記事だった。宿舎から古墳までの往復は、小松さんが交渉して公用車一台を手配してくれ、茨大の貝塚由美子君が参加者をピストン輸送してくれた。笑い話だが、市役所に「サンガラスの若いネーチャンが市役所の車を運転してる!」と何本か通報があったという。また、八号墳の周りはネギ畑で、そこに休憩用のテントを張り、焚火などで暖をとったが、小松さんが「ネギを焼くと甘くてうまい」というので休憩時間などには結構焼いて食べてしまった。そのトロリとした甘いネギは結構な畝数を食べたが、小松さんは地主さんに交渉して補償費を支払うことで了承を得たが、寒い発掘現場では何よりの御馳走だった。



舟塚山古墳トレンチ調査風景



2025年6月28日 来館者

「乳飲み児を抱く埴輪」Tシャツ!?

令和7年度のひたちなか市埋蔵文化財調査センター遺跡めぐりは、「福島県南相馬市大悲山石仏を訪ねて」と題し、福島県南相馬市を訪れました。

途中、高速道路の事故通行止めにも遭いながら、なんとか11時半ごろにバスが到着しました。現地で私たちの到着をお待ちくださっていた南相馬市教育委員会の藤木海さんのご案内で、石仏見学は始まりました。

まずは薬師堂石仏へと急な階段を上っていきます。階段の途中には巨大なスギが生えていて、しばらくは巨大スギの写真撮影会です。前座の巨木で気分が盛り上がったところで、いよいよメインの薬師堂石仏の登場です。「すごい・・・」と、言葉にならないみなさんの感動が感じられます。今回は特別にガラス扉の

内部に入れていただいたため、石仏の迫力は倍増です。藤木さんは写真を使ってわかりやすく説明してくれたので、石仏の理解が深まりました。みなさん、ホトケサマの前だからか、とても静かに見学していました。

名残惜しい薬師堂石仏をあとにし、歩いて阿弥陀堂石仏へ向かいました。阿弥陀堂石仏は残りがよくないので、さらっと見学して、いったんバスに戻り、観音堂石仏へ。

観音堂石仏は、東日本大震災のときに覆い屋が崩れてしまい、現在は新しい覆い屋が建っています。その工事の事前発掘調査を担当されたのが、当日ご案内いただいた藤木さんです。調査の話を交えながら観音堂石仏についてご説明くださり、贅沢な時間をここでも過ごすことができました。

(佐々木義則)



歴史の小窓 その三三

形見？鎮具？



これは九世紀中頃の西埴遺跡三一五B号住居跡から出土した石製の丸軻まるこです。丸軻とは古代の役人がつけていた腰帯ようたい(革のベルト)に付けられていた飾りです。

腰帯にはこうした飾りがいくつも付けられていたのですが、この住居跡からは、たった一つだけ、壁際の床面から出土しました。このように一つだけ出土する例は他の遺跡でも多くあります。こうした出土例について田中広明氏は、宝物的性格を持ちつつ腰帯使用者との関係を示す物品(形見)である可能性を考えられています。

丸軻が壁際の床に置かれていた状況は、本郷東遺跡一号住居跡の壁際に、住居廃絶のカマド祭祀で用いられた灯明具が片付け置かれていた状況と似ています。もしかすると住居廃絶時の祭祀で鎮具として用いられたのかもしれませんが。

形見なのか鎮具なのか、それともその両方なのか。住居出土の腰帯具は、謎に包まれた遺物です。

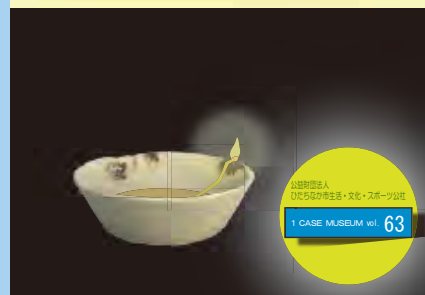
(佐々木義則)

参考文献 田中広明「〇三三「石帯の流れ」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』

第三七号

日時 令和7年
5月23日[金]ー7月6日[日]
休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）
開館時間 午前9時ー午後5時（入館は午後4時30分まで）
入場無料
場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中郷3499
☎029-276-8311

住居跡に残された灯明具



ワンケース・ミュージアム63は、ひたちなか市内の古代の住居跡の床面から出土した灯明具を選び出して展示しました。

平安時代にまとめられた『延喜式』（律令の施行細則）によると、灯明具に用いられた油は胡麻油が多く、灯心は麻布でした（桑田二〇二〇）。平城京では油の価格が米の10倍ほどだったため、灯明具を照明としたのは、主に貴族の邸宅や寺院役所であったようです。ただし『日本霊異記』には、個人が仏に献灯する姿が書かれていますので、ひたちなか市から出土した灯明具も神仏へ祈りを捧げた時に用いられたものと想像されます。

カマドの脇に置かれた灯明具

西郷遺跡三一〇号住居跡（九世紀前半）は火事に遭った住居ですが、カマド右側の棚状遺構の上に、二つの須恵器杯が口を上に向けて残っていました。そのうちの一つの杯の口縁部には油煙の跡がありましたので、灯明具として用い

られたようです。また棚の前の床からは、須恵器の長頸瓶が横倒しになって出土しました。杯とともに棚に置かれていたのでしょうか。

当住居跡からは、煮炊き可能な土師器甕が出土してはいないうえ、カマドが壊されていたので、火事に遭う前に、まだ使える甕やカマドの材料などを持ち出していたのではないかと思われます。つまり、引越し作業を終えた後に、カマドの脇で灯明を灯し、神饌を盛った杯をお供えし、家の神でもあったカマドの神に祈りを捧げたのではないのでしょうか。火事はその後に起こりました。もしかすると灯明の火が竪穴住居の屋根の裾に燃え移ってしまったのかもしれない。

カマドの前に伏せ置かれた灯明具

下高井遺跡三次調査三号住居跡（九世紀前半）は、カマド前の床から油煙が付いた須恵器杯が出土しました。伏せられていたので、灯明具として使われた後に、伏せて片付け置いたものと考えられます。

当住居跡も、使える状態の土師器甕が出土しなかったことや、カマドが壊されていたことなどからみて、引越し作業終了後に、灯明を灯し、カマド神に祈りを捧げたものと思われます。

壁際に伏せ置かれた灯明具

本郷東遺跡八次調査一号住居跡（八世紀前半）では、壁際の床から油煙が付いた須恵器杯が出土しました。伏せ置かれていたことから、灯明

具として使われた後に、壁際に伏せて片付け置いたものでしょう。

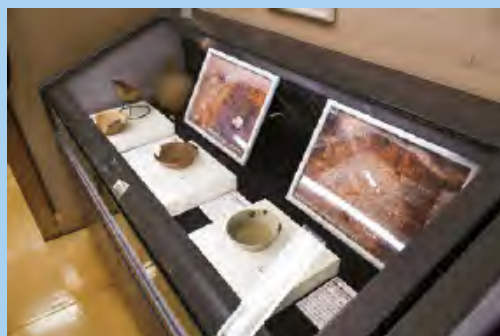
当住居跡も、使える状態の土師器甕が出土していないことや、カマドが壊されていたことなどからみると、引越し作業の終了後に、灯明を灯して神に祈りを捧げた後、灯明具を壁際に伏せて片付け置いたものと思われます。

以上のように、住み慣れた住居とお別れをする際には、家の神であったカマド神へ献灯して、感謝の祈りを捧げた場合があったようです。祈りの場であった薄暗い竪穴住居の室内には、灯明の光とともに、香ばしい胡麻の香りが広がっていたのかもしれない。

発掘された住居跡は、その最後の姿を私たちに示しています。床に残された灯明具は、住居を引越すときに何が行われていたのかを、私たちに教えているのです。

参考…桑田訓也

二〇二〇「文献からみた灯明皿」灯明皿と官衙・集落・寺院」奈良国立文化財研究所編



展示のようす

1 CASE MUSEUM Vol.64 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

十五郎穴出土の玉類

日時：2025年7月19日（土）
▶9月7日（日）

休館日 月曜日（休日の場合は翌日）
開館時間 9:00~17:00（入館は16:30まで） 入場無料

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
茨城県ひたちなか市中根3499 TEL:029-276-8311

今回の展示では、十五郎穴横穴群の指洪支群（じゅうこうあなよこあなぐん）VI区第一〇一号墓から出土したガラス玉や勾玉（まがたま）・切子玉（きりこたま）を展示。ガラス玉について近年実施された蛍光X線分析の成果をもとに解説しました。

遺跡の概要

指洪支群は、十五郎穴横穴群の中で北側に位置する支群です。一九七七（昭和五二）年から一九八〇（昭和五五）年にかけて、当時の勝田市教育委員会と明治大学により発掘調査と分布調査が実施され、横穴墓一一九基について報告されています。玉類は、一九七七年度の一次調査で確認されたVI区第一〇一号墓で検出されました。調査時には開口状態でしたが、玄室内（げんしつ）からガラス小玉一四五点（そのうち三三点は覆土中）、ガラス丸玉八点、滑石製小玉六点、メノウ製小玉一点、メノウ製勾玉八点、水晶製切子

玉五点が検出されたと報告されています。

古代のガラス玉について

日本列島でガラス玉が出現するのは、弥生時代前期末から中期初頭です。当時はまだ翡翠製（ひすい）勾玉（くぐたま）や碧玉製（きぎょく）管玉（くだたま）などの石製の玉が主流で、広く流通し始めるのは弥生時代後期になってからになります。古墳時代になると、形態が様々な多量のガラス玉が流通するようになります。ほとんどは大陸からやってきた舶載品（はくさいひん）で、日本列島で流通したガラス玉はインド・パシフィックビーズと呼ばれ、同じ特徴のガラス玉がアフリカ大陸東岸部からインド南部、東南アジアの各地の地域に分布することがわかっています。

古代のガラス玉の主成分は二酸化ケイ素で、融解温度をさげる融剤や着色剤の原材料を調査し熱することで作られます。原材料は産地によって異なり、玉へ成形する技法にも違いがあります。現在ではそれらの違いを基に、遺跡から出土する様々な古代ガラスについて、成分を理化学的に分析し産地が特定されています。

ガラス玉の分析

二〇二三年に十五郎穴出土のガラス玉の蛍光X線による成分分析が実施され、肉眼とデジタル顕微鏡を用いた製作技法の観察も組み入れたガラス玉の分類が行われました。

その結果、高アルミナソーダ石灰ガラス（酸

化ナトリウムを使用し酸化アルミニウムが多く酸化カルシウムが少ない）が約七〇点、植物灰ガラス（植物の灰を利用しナトリウムガラスよりも酸化マグネシウムや酸化カリウムの含有量が多い）が約七五点、ナトリウムガラス（炭酸ナトリウムや炭酸水素ナトリウムを主成分とする鉱物系の原料を使用）が五点という三種に分類されることが判明しました。

デジタル顕微鏡の観察では、孔と平行に並ぶ気泡の列や長く伸びる気泡筋がある様子が観察され、引き伸ばし法と呼ばれる柔らかくなったガラスを管状に伸ばし、分割して小玉を製作する技法のガラス玉が多いこともわかりました。

（詳しくは本号より二六頁参照）

参考文献 鎌田涼二〇二四「常陸中部沿岸地域における後期・終末期古墳出土ガラス小玉への蛍光X線分析」『筑波大学 先史学・考古学研究』第35号

（田中美零）



展示風景

文の々 埋センターの日 2025 前期

4月

2 放課後等デイサービス ウィズ
ユーひたちなかの小学生見学／
11 虎塚古墳石室点検／15-25 地
蔵根遺跡試掘調査／15-22 南宿後
遺跡・東原遺跡試掘調査／22-25
市毛下坪遺跡試掘調査／24 市議
会文教福祉委員会視察

5月

8-14 向坪遺跡試掘調査／10 茨城
キリスト教大学博物館実習実務実
習



／11企画展「装飾古墳の世界
2」終了／13-15 新平遺跡試掘調
査／20-21 老ノ塚遺跡試掘調査
／21-23 磯合古墳群試掘調査／
21-29 田宮原Ⅰ遺跡試掘調査／

23 ワンケース・ミュージアム 63

「住居跡に残された灯明具」開始／
23 遺跡めぐり「大悲山石仏を訪ね
て」実施／25 國學院大學博物館実
習に伴う見学／27 中根小学校3
年生見学



／27-29 三反田新堀遺跡試掘調査
／29 水戸市常陽史料館に遺物貸
出【鉾ノ宮古墳群の埴輪など】



／30 東京国立博物館資料返却【乳
飲み児を抱く埴輪】

6月

4 峯ノ山遺跡試掘調査・茨城大学
井野氏資料調査【下高井遺跡裏など】
(右下)／5 文化財室主催文化財講
座／11 茨城大学出張授業【センタ



の活動について)／12-18 市毛上坪遺
跡試掘調査／13 市生涯学習課こ
らぼDEまなぼ「虎塚古墳と十五
郎穴横穴群」国指定史跡への歩み
とこれから」・菅谷西小学校6
年生見学



／18 茨城大学出張授業【虎塚古墳の
保存について】・国際交流サービス団
体見学／24 堀口遺跡試掘調査開
始／26 堀口小学校4年生見学

7月

堀口遺跡試掘調査終了／1-4
老ノ塚遺跡試掘調査／1-8 向坪遺
跡試掘調査／3 茨城県立歴史館
職員研修／6 ワンケース・ミュ
ジアム63「住居跡に残された灯明

虎塚古墳
花便り

35
ホトケノザ

今回ご紹介する花は、春の道端などでよく見かける「ホトケ
ノザ(仏の座)」です。別名「サンカイグサ(三階草)」ともい
います。ホトケノザはシソ科オドリコソウ属の植物で、北海道
を除く日本全土に分布しています。草丈は10〜30cmで、葉
のふちはギザギザしており、葉の付け根あたりに約2cmの紫色
の花を咲かせます。開花時期は三月から六月です。名前の由来
は、花の下にある葉の形が「仏様の台座」に似ていることに由
来するとされます。このことから、花言葉には「調和」や「小
さな幸せ」などがあります。

ホトケノザというと「春の七草」を思い出しますが、別の植
物であることを知りました。七草のホトケノザは「コオニタビ
ラコ(小鬼田平子)」というキク科の植物だそうです。今回紹
介したホトケノザは毒性はありませんが、食用にはお勧めでき
ないそうです。お気を付けください。
(稲田健一)



2025.3.22

* 前回の花便りで紹介したリュウノウギクを「花便り 36」としましたが「花便り 34」の間違いでした。

具」終了／8-10市毛下坪遺跡試掘調査／16-19市毛上坪遺跡試掘調査／19ワンケース・ミュージアム64「十五郎穴出土の玉類」開始／19ふるさと考古学①「ようこそ考古学へ1」(講師：さかいひろこ氏)／20ふるさと考古学②「ようこそ考古学へ2」(講師：さかいひろこ氏・海老原四郎氏)／23向坪遺跡発掘調査開始／24小美玉市小川資料館資料貸出(武田遺跡群太平洋戦争関連資料)／26ひたちなかキャリア探検ラリー①／31佐野小学校児童クラブ見学



8月
3ふるさと考古学③「探訪!馬渡はにわ公園」講師：助川諒氏・さかいひろこ氏)／57東原遺跡試掘調査／16国営ひたち海浜公園「勾玉づくりに挑戦」指導／19-21高野富士山遺跡試掘調査・インターンシップ(茨城大学・大妻女子大学)／19-24博物館実習(筑波大学・駒澤大学)

子大学)／19-24博物館実習(筑波大学・駒澤大学)



／20市教職員研修・ひたちなかキャリア探検ラリー②



／21-27黒袴遺跡試掘調査／23ふるさと考古学④「遺跡から考える戦争」(講師：玉川里子氏・さかいひろこ氏)／26-27東北学院大学遠藤氏資料調査(武田西堀遺跡石器)

／20田宮原I遺跡試掘調査開始

9月

2-12柴田遺跡試掘調査／4明治大学川口氏資料調査(武田石高遺跡土器)

「石」／4田宮原I遺跡試掘調査終了／7ワンケース・ミュージアム64「十五郎穴出土の玉類」終了／11茨城県立歴史館資料貸出

入館者状況 (2025.4.1. ~ 2025.9.30)

月	開館 日数	個人 (人)	団体 (団体)	計 (人)
4月	26	325	2 (0)	327
5月	27	288	5 (3)	293
6月	25	282	6 (2)	288
7月	27	345	5 (0)	350
8月	27	518	13 (0)	531
9月	25	219	2 (0)	221
合計	157	1977	33 (5)	2010

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記ホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

【乳飲み児を抱く埴輪】／11向坪遺跡発掘調査終了／12常陽史料館資料返却／17-24市毛上坪遺跡試掘調査／21ふるさと考古学⑤「虎塚・十五郎穴のまわりのコケの世界」(講師：鶴沢美穂子氏・さかいひろこ氏)／27ふるさと考古学⑥「虎塚・十五郎穴のまわりの植物」(講師：小幡和男氏・さかいひろこ氏)／30島ノ原遺跡試掘調査開始



編集後記の 虎の子

二〇二五年二月、市内の船窪遺跡群や三反田蜆塚貝塚などの発掘調査でご活躍なさった窪田恵一さんが急逝された。突然のお別れだったの、私は数日間気が抜けたような状態だった。

窪田さんは、在野の考古学者で、茨城県内を中心にたくさんの方の遺跡を訪れ、ご指導をされていた。特に、旧石器時代の研究では、ひたちなか市を含め茨城県の旧石器文化の発展に貢献された研究者である。

ひたちなか市では、一九九八年に船窪遺跡群船窪遺跡とぼんぼり山遺跡で調査員を務めていたとき、その後の整理作業と報告書では旧石器時代の遺物をまとめたいただいた。翌年の一九九九年には、三反田蜆塚貝塚の調査員を務め、現在市の指定文化財になっている土偶を発掘している。また、この遺跡では新人職員に対して優しく丁寧に考古学の指導も行っていた。ここ数年は定期的にひたちなか市を訪問してくれて、旧石器時代の指導や県内の遺跡の情報等をお話しになつていた。これから、楽しくお話しする機会がなくなってしまう。謹んでご冥福をお祈りいたします。



1998年 ひたちなか市船窪遺跡群での昼食

ひたちなか埋文だより 第63号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2025年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 大富印刷株式会社

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ

